

## わがまち歴史散歩

## 池田で買い物

## ○法事の記録

文久元年（1861）8月16日、現在の川西市東畦野地区で、当時あった寺の開山和尚百五十回忌の集まりが、寺の世話人や有力者たちを中心に実施された。同じ村内の寺、今の能勢町長谷地区にある寺、さらには京都からも2か寺が寄り集まった。

料理の準備も大変だった。それを記録した「雑用覚」には、釜の掃除、長谷地区の寺に案内に行く人の日用賃、さらには、買い物や容器の手配、料理人の雇用までごまごまと記録されている。

買い物でそろえた品物は、酢5合、みりん8合5勺、うどん粉4貫目、上々味噌2貫目、上醤油5升、もち五文取り10、大豆4升8合、まんじゅう175、くす1升、酒1斗7合、上新炭1俵、あづき1升余、とぶぶ5箱、白米1斗であった。このほかに「福せ」という料理屋から人を呼び、さらに茶漬け用茶碗10人前を出してもらっている。これらの費用は銭19貫498文に上った。当時の銀に換算すれば約269匁11008グラムになる。たいへん大きな買い物であった。こんな買い物、池

田周辺地域全体に広げれば結構あったと思う。それらを合わせたら相当の金額となるだろう。

## ○村の催事を支える池田の町

さて、この買い物、どこでしたのか。酒1斗7合は購入した店名から見て、山下町の北側下財屋敷であることは明らかである。しかし、ほかには、「池田買物」という文字が3か所、また「池田龍松」との記載も1か所ある。つまり、池田に行っている。そう考えれば、料理人を頼んだ「福せ」も池田にあったのかもしれない。

要するに、周辺村々では、なか集まり事するとき、池田での買い物、料理人の雇用は普通になっていたと考えるべきであろう。池田の町の上得意と言わねばならない。では、その周辺とはどんな範囲なのか。それは池田にとっても、また周辺村々にとっても調べる価値の高い課題となるであろう。

## ○元禄の池田村絵図に店を探す

では、村の人たちは実際に池田の町のごで買い物をしたのだろうか。ここでは最近ずっと見てき

た元禄10年摂州豊島郡池田村絵図で試みてみよう。

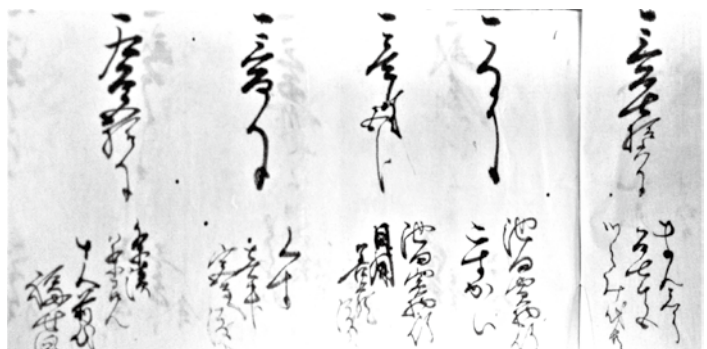
もちろん、元禄から文久までおよそ150年の隔りがある。店もほとんどが入れ替わっているし、文久には元禄に存在しない商品を扱う店もあるだろう。それでも、元禄の絵図で確認すると、逆にそつした需要にこたえる体制が池田側にいつごろから存在したか見えてくるかもしれない。

## ○北からのお客はまず…

池田へ買い物に来る人は、東西南北四方向から町に入る。そのうち北から来る人は北新町へと入ってくるのが普通である。東畦野村から買い物に来た人はまず北新町で店を探し、なければ中新町から南新町へ、さらにあちこち探すと

なるだろう。さて、そこで、北新町の通りを北から順に眺めていくと、東側には鍋屋、小間物屋（2軒）、豆腐屋と並ぶ。豆腐はここで手に入る。ただし、これは福せに頼んでいるので買わない。さらに見ていくと、たばこ屋、檜物屋、古手屋、瀬戸物屋、餅屋と出てくる。「あ

あ、餅屋」となるだろう。続いて道を歩けば、まんじゅう・上新



畦野地区で開かれた法事の記録。「池田買物」の文字が見える

炭・上々味噌が買えた。す(酢)・みりん・うどん粉・上醤油・あずきなどは見当たらなかった。おそらく、これらの品は、元禄期には個人の家庭等で製造し保管していたのだろう。時代が進むにつれ、調味料や家庭で使うその他の食品も商品化が進んだことが確認できる。池田は町としてさらに進化するのである。

(市史編纂委員会委員長・小田康徳)

◆問い合わせは生涯学習推進課 市史編纂 ☎754・6674